

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0635 ◆◆◆

21/05/12

## 【「オリンピックと為替市場」の関係は!?】

東京オリンピック・パラリンピックの開催をめぐり、議論が紛糾している。発言を聞く限り、菅首相は何が何でも開催する考えであるようだが、読売新聞が7-9日に実施した世論調査によると、「開催反対(中止希望)」は実に59%にも達しており、無観客か否かという内容はさておき、「開催賛成」と回答した向きは39%にとどまったという。実際の開催日まで残り70日程度、刻一刻と迫るなか、本当に開催できるのか否か、まだまだ予断は許さないが、そんなオリンピックと為替市場の関係について調べてみた。

### ◎通常「開催国の通貨高」も見込めるのだが……

インターバンクディーラーなど専門家のあいだを中心に、「オリンピック開催年、開催国の通貨は堅調に推移する」と指摘されることが多い。ある種の経験則、アノマリーとも言えそうだが、過去に遡って調べてみたところ、確かにそうした傾向はうかがえるものの実は微妙に異なる。具体的な内容については、以下で詳しく説明をしたい。

ちなみに、「オリンピック開催国の通貨が上昇する」という理由については、会場の建設などインフラ整備に巨額な資金が必要となるうえ、視聴するテレビなどの広告効果を受けた売り上げ大幅増加や海外からの渡航者増による国内消費のアップも期待されることが挙げられている。つまり、開催国のファンダメンタルズ改善観測が開催国通貨買いを促進させる、という理屈としてもなかなか判りやすい事象と言えそうだ。となると、東京オリンピック・パラリンピックが開催される今夏は円高傾向が強まる展開を否定できないのかもしれない。

しかし、オリンピック開催国と通貨の関係をさらによくよく調べてみると、開催国通貨高は、「寿命」は意外に短い。かなりの短命に終わることが少なくないようだ。もう少し具体的に言えば、早ければオリンピックの開催前にそうした動きは終了。遅くとも、オリンピックの閉会前後を高値に開催国通貨が大きく下落するケースが目につく。

これは、改めて指摘するまでもなく、為替など金融市場は材料を「織り込み」などといったように、先食いする傾向にあるためだ。「麦わら帽は冬に買え」というなど、様々な相場格言に示されていることもご承知の通り。よって、先で指摘した様々なオリンピック特需も市場が先食いした結果、肝心のオリンピック開催時にはすでに終盤、あるいは終わっている公算が大きいようだ。とするなら、前段で取り上げた結論とは裏腹に、為替市場が今夏円高へと向かう可能性はあまり高くないようにも思っている。

ただし、前述してきた「オリンピックと為替相場の関係」は、飽くまで過去の経験則。これまで過去に「通常通り」開催されてきたことに対してのものになる。けれど、周知のように今回の東京オリンピックは、前代未聞となる1年間の順延がすでになされているうえ、さらに前段で取り上げたように「開催中止」を求める声も多く、実際に新型コロナの感染状況如何ではそうなる可能性もゼロではないだろう。また、仮に開催されても、先で指摘した「開催国通貨高要因」である「海外からの渡航者増による国内消費のアップ」というものがまったく期待できないことも言うまでもない。

総合すると、今年の「東京オリンピック開催＝円高」という図式は予想しにくいと言えそうで、それどころか場合によっては「開催＝円安」という、過去にあまり例を見ない図式が成り立つような気もしている。開催まで、残り2ヵ月強だが、状況は依然として読みにくいままで、為替市場の先行きも混んとしている感を否めない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

